モッコス父ちゃん

新港分会　中川M

生まれは菊池。そしてその産湯で育ち、十六歳の時から、大牟田の黒スズメの仲間入りをしたといいます。

当年五十一歳。いや新年を迎えましたから五十二歳になる、父ちゃん。

人並み以上のかん難辛苦の歳月をのり越えて、も早や勤続三十六年の炭鉱マンです。

昔から、入坑前に風呂には、るとかで、出勤時間は、人よりも一時間くらい早く家を出ます。

時間に少しでも準備が遅れようものなら、肥後モッコスぶりを発揮しておかんむり。

こっちも負けずに、むっつりと弁当を包み、シャツと置けば父ちゃんはそれをスッととって出てゆきます。

そういうことがあった日はきまって、坑内着の洗濯物を入れた大きな袋を背負いながら、最敬礼して帰ってきます。

私もおかしさこらえ、父ちゃんの光る頭を見ながら、だまって最敬礼。

結婚以来二十余年。

「いってらっしゃい」も、「お帰りなさい」もいったことはないけれど、父ちゃんの光った頭をおがんでおれば、私の心はいつも晴天なり。

パチンコに負けて来るのと、季節に応じての山登り、魚釣り以外に何の取り柄もない、喜憂のはげしい父ちゃんだけど、三池労組の組織の中で学び取った人生で一番大切な〝清〟ということを知る父ちゃん。会社のあらゆる差別や合理化に抵抗しながら、歯を食いしばって頑張っている姿は、やっぱしモッコス父ちゃんならでは、とちょっぴり誇りに思っている次第です。

喜ばれた主婦会四山の贈物

前略ごめん下さい。

寒さも、いちだんときびしくなって参りました。

児童福祉施設大牟田母子寮に三池主婦会四山支部の皆様の心あたたまる慰問品、ありがとうございました。

物価上昇の折り、食べるのに一生懸命で、衣類にまでは手がとどかず、さびしい暮れでございました。

親の心も知らず、成長ざかりの子供達は、よごす、破る、はいらない……の連発でございます。

三十名の児童と母親達で話し合いをして、仲良く分けよう、と思っております。ほんとに助かりました。

心から深くお礼を申し上げますとともに、今後の三池主婦会四山支部のご発展とご健康をお祈り申し上げます。　かしこ

大牟田市母子寮
母の会一同

三池主婦会四山支部様

×

過日主婦会四山は、不要品交換会を行った折、大牟田市小浜町四四の母子寮に、交換品の一部をおくって大変喜ばれた。右は、そのときのお礼状である。

短編　首相の顔写真

三川指導部　岡浦益実

三番方あがりの白坂昭二は、昼過ぎに床を離れたが、所在なげにテレビの前に腹ばって、大きなあくびをしながら新聞を広げた。

十一月三日は文化の日と日曜が重なっていた。翌四日は、労働時間短縮の闘いで勝ち得た特定休日だから、炭鉱労働者にとっては貴重な連休である。

しかし連休を利用して、たやすく遊びに行けるだけの経済的な余裕を持たない昭二は、家でゴロゴロしているより仕方がない。

昭二は、寝たりない顔で新聞の活字を追っていた。

「今年の文化の日は、チリ紙買いに走らんでよかね」テレビを見ていた妻の留子が言った。まだ完全に睡気の去らぬさえない顔を新聞から離し「ほんなこてね」と、昭二はあくび混りに言った。

そういえば、去年は何という文化の日だったろう。文化とは、世の中がすすんで文明になることらしいが、まるで逆行ではないか。

昭二は、妻に言われて去年の文化の日を思い起こした。

去年のその日も、今年と同じように家でゴロゴロしていた。読みかけの雑誌を顔に乗せてうたた寝していた昭二は、留子の声で目をさました。留子は買物籠を提げたまま娘の治子と話している。

「チリ紙の、どこの店にも無かつよ。ようよT店にあったけん買うてきた……」

夕食のおかずを買いに行った留子は、ついでにチリ紙を求めようとしたら品切れで、いつ入荷するか分らないと聞かされ、慌てて近所の店を三、四軒回ったが、どこも同じだった。

やっとのことで二つ手に入れたが、隣の家も買い置きがなかったので、一つ分けてきたということである。

留子は、昨日買物に行った県境のマーケットに沢山あったので、余程買って帰ろうかと思ったが持ち荷になるし、いつも近所の店や農協にもあることだからと、買わずに帰ったことを、たいそう悔んでいた。

「ずーっと無かつじゃろか？」娘の治子が心配そうに言った。

「そげんいつまっでんじゃなかろばってん、困ったこつね」留子は、やっと求めた一包みのチリ紙をうらめしそうにみつめた。

「チリ紙は死にもの狂いで買いよらすとのテレビに出たばってん関西の方じゃったけん、まさかこっちまで無うなるてちゃ思わんもんじゃけん」留子は夕食の準備どころではないらしく、買物籠を降ろして座り込んだ。

「テレビも新聞も毎日見よっとに、いっちょん分らんじゃった。やっぱアホちゃんがつしかなか」

留子は自嘲めいて言ったが、いくら利口者でも、チリ紙が突然巷から姿を消すなんて誰が予測できるか。そんなことを庶民が事前に察知するなど無理な話だ。

「これが無うなったらどげんすっとね？」娘の治子は不安そうな表情を浮かべている。

「心配すんな。チリ紙の無かぐらいで死にはせん」

妻と娘の話を寝そべって聞いていた昭二が起き上がって言った。

「昔はね、とうさんがこんちょかときゃ新聞ガミで尻ば拭きおったつぞ。今でこそチリ紙しか使わんが、昔の便所ガミは新聞ばかりじゃった」

「そげん言うたっちゃ、ネエ」

留子は治子の同意を求めるようにいってから「昔と違うよ」と反発した。

「チリ紙の無かならしよんなかじゃっか。何ででん拭わんなら」

昭二は子供の頃に馴染んでいた便所を思い浮かべた。

適当な大きさに切り、端に紐を通した新聞紙の束が便器の前にぶら下がっていた。それをちぎって使用するのだが、用便しながら記事を読むのも楽しみだった。

面白い記事にぶっかり、尻切れになったその続きを、何等分にも切って重ねた束の中から探し出すのに苦労した思い出もある。

とうに排泄は済んでいるのに記事に夢中になって、いつまでも便所から出ないので、「いつまで入っとるか。学校におそなるぞ」と、よく母親に怒鳴られたものだ。

排泄を司どる器官にしてみれば全部吐き出したのに、いつまでもしゃがんでいられると、今度は何を押し出したものかと随分とまどったことだろう。

読み終えた新聞をていねいにもみほぐして使ってから、やおら発射の態勢を崩していた少年時代を昭二は懐しく思い出した。

世の中がすすみ、やっと文化国家になったと思っていたら、また昔のように新聞紙で尻を拭けというのか。それならそれでいいぞ。

「新聞な固かけん、ようともんでから使わなんぞ」昭二は、新聞紙を用便に使った経験のない娘におしもむ手つきをしてみせた「あんまり強うもむと破るっぞ」。

昭二は、張った縄をまたいで拭く国の話や、あるいは木の葉で、また、川で洗まして川の水で洗う国の話などを調子にのって駄弁った。「しゃんむりチリ紙の無かとでけんこつあなかつぞ」。

話をきいていた留子が「何ば馬鹿ンこつ言いよるね。冗談はさておいて、県境から二つ三つ買うてきて」と言った。

「さしより使うとのあるけんよかろもん」昭二は放り出していた雑誌をとって頁をめくった。

「これだけで何日あると思うとっとね。すぐ出回るて分っとるならよかばってん」

「そんときゃ、いま言うたごつ新聞ガミで……」

「冗談ばかり言うて、おとうさんは日に二回もいくくせに、おとうさんが一番使うとよ」

「バカ言え、いくら俺が日に二回たれるていうても、かあさんが俺の何倍も要るぞ。俺は小便の時は使わんぞ」

小用のあと、男はふりきればいいが、女性ではそうはいかない。紙を使わずにしずくをふり落すためには、便器をまたいだままウサギ跳びをしなければなるまい。あられもない恰好でピョンコピョンコとは何とまあしんどいことだろう。ご苦労さまと言いたいところだが、実際にはそんな呑当じみたことは出来っこあるまい。

本当に女は厄介で不経済にできているものである。

「なんとんつくれんこつ言うとるうちに無うなるかも知れんよ。早よ行って……」。

昭二にとってチリ紙とは、いつも便所に備えてあるもの、若し入ってなかったら、「カミッ」と、用を足しながら怒なると、留子が急いで持ってくるものだと思っていたのに、自分が買いに行かねばならない破目になったのには参った。

どんな種類でも、少々高くてもいいから、早く買って来てくれと留子に急きたてられて昭二はバイクをとばした。

（どこかにあるさ）と、多寡をくくっていた昭二の甘い考えは、県境に着いてすぐかき消された。

○○ストア、△△ショッピングセンターなど、どのスーパーマーケットからもチリ紙は完全に影をひそめていた。

薬局、雑貨屋、文房具店と馳け回ったが無駄であった。

手ぶらで帰宅した昭二は家族に言った。「こうなったら仕様ンなか。新聞紙ば使うしかなかぞ」。

石油危機が原因だなどといわれているが、いちどきに姿を消すということは、どう考えても筋が通る話ではない。

「またすぐ出てくるよ。そんかわり今度出まわるときゃ、値段のうんと上がっとるじゃろ」。

留子がいうように価格を吊り上げるための策謀としか思えない。

それを消費者の買い溜めなどと宣伝してごまかしている。馬鹿にするな。買い溜め出来るような賃金を資本家が出したことがあるか。

「田中さんの代になってから、いっだん悪うなったね」。

庶民宰相の出現ということで、当初は国民から期待された現首相の評判は日増しに悪くなり、支持率も著しく低下していた。

「おい、総理大臣の写真の出とる新聞ば集めとけ」突然昭二が言った「それで尻ば拭いてやる」。

日本列島改造などと大見得を切って、国民を苦しめた高慢ちきな首相の顔写真を、くしゃくしゃにもみつぶして尻でも拭かねば腹の虫が治まらぬ。それが俺に出来るせめてものうっぷん晴らしだと昭二は思った。

チリ紙騒動のあと、砂糖、石けん等々、生活に欠かせない品物があれもこれも姿を隠しては値をつり上げて再現した。

今年の文化の日は、チリ紙を求めて駆けずり回らなくてよかったが、その代りあの時からすると相当物価が上がっている。また来年も郵便料などの公共料金をはじめあらゆる消費者物価が、値上げ競争に遅れをとるまいと手ぐすねひいている。それも遠慮会釈もない大幅を狙っているのだ。

陰でボロもうけを企んでいる一部の特権階級にあおられ、はやしたてられて走りまわる消費者こそいい面の皮である。

しかし、少しぐらい高くなっても品物がありさえすればという安易な考えや、どうせなるようにしかならんのだという諦めに似た感情が、国民の気持の中に巣くってはいないだろうか。

くらしにくい世の中になるのは金権政治をいつまでも容認している国民の側にも責任はあるのだ。

大衆のための政治を望むなら、大衆がいま少し目覚めない限り実現は不可能ではないだろうか。

昨年のチリ紙恐慌の折には、新聞紙を使うからいいと言ってはみたが、更年期真近の女房や適令期の娘の身になるとそうもいかず、昭二は重たい腰を上げて方々を探しまわり、ようやく田舎町の文房具店で手に入れ、ひと息ついたものだ。

カミ隠しが一段落したので、首相の顔写真は昭二に尻を拭かれなくて済んだものの、最近では首相の〝金脈〟問題がさらけ出され、政権が大きくゆらいでいる。

金の力であぐらをかいていた現首相の権力の座は、余命いくばくもなかろう。

しかし、腐敗した今の自民党幹部の中に、真剣に国民の生活を考えて政治にたずさわる人があるだろうか。誰が首相の後がまに座っても期待はもてそうにない。

（去年の文化の日は忙がしかったなア）昭二は指先で新聞をめくった。

（今度こんなことをしでかす首相が出たら、ためらわず新聞の顔写真で尻を拭いてやる）

秋の叙勲受彰者一覧表をながめながら、昭二はそう思った。

（おわり）

給料

宮浦指導部〝交流〟